

歴史的街区における街路空間の評価に関する研究 - 京都市中京区における街路表象の特性 -

日大生産工(院) ○眞智 香苗
日大生産工 宮崎 隆昌

1.研究背景

我が国においてモータリゼーションの進展は高度経済成長と共に拡大し、自動車普及率のみならず我が国の社会・ライフスタイルをも大きく変化させた。様々なものが自動車に照準を合わせ、形状・機能を変化させていったが、自動車によって変化したものの中で、象徴されるのが「道」であろう。モータリゼーションが進行し、自動車交通中心の社会となった今日、「道路」は主に自動車路としての意味が強くなったが、自動車交通が普及する以前は、「道」は通行としての意味よりも人々の交流・滞留の場として機能していた。道端では住民が近所同士の人と世間話をしたり、子供は地面に落書きをして遊んだり、縄跳びをしたりと、「道」はその地域に暮らす人々にとって最も身近な交流の場であった。自動車が普及して以来、その「道」を自動車が容赦なく通るようになり、「道路」は危険な場所となり、通行路として限定されてしまった。

2.研究目的

歴史的に道空間と生活とが深く関わりを持っている地区として京都が挙げられる。京都では10世紀後半から、地域生活と深い関係性を持つ歩行路としての道空間が自然発生的に形成され、1000年以上も道を中心とした生活が営まれてきた。また、京都には街路から枝分かれした路地が数多く見られ、モータリゼーションにより街路の意味・機能が変わりつつある現代において、路地は都市生活の安全性や快適性を与えることのできる潜在的な可能性を備えている数少ない空間装置の一つであると考えられる。そこで本研究では、街路空間を評価し、持続可能な都市空間、市民の生活空間としての路地空間のあり方を積極的に評価し、再生への方途を検討にすることを目的とする。



Fig.1 京都市中京区

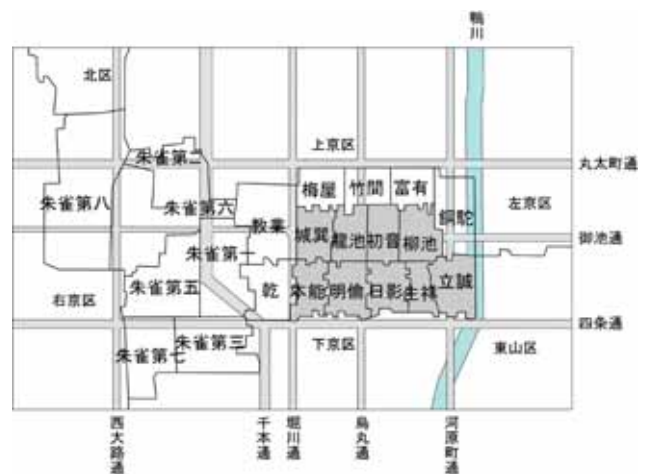


Fig.2 中京区の元学区と調査対象地区

3.研究対象

京都市中京区は商業・ビジネスの中心であるが、夜間人口も多く、長屋や路地など、居住地とし

ての環境も合わせ持つ(Fig.1)。また、祭りや伝統文化も受け継がれ、職住文遊の共存するまちであると考えられる。中京区には23の元学区がある。元学区とは戦前までに形成されていた小学校の通学区域を示していたが、戦後の学制改革に伴い小学校の通学区域が拡大したが、現在でも元学区は日常生活圏を表すのに用いられるコミュニティ区画の1つである。本論文では中京区の堀川通～河原町通・二条通～四条通で囲まれた範囲を研究対象地とし、城巽学区・龍池学区・初音学区・柳池学区・本能学区・明倫学区・日影学区・生祥学区・立誠学区が対象となる(Fig.2)。研究対象地内に多数存在する路地について、街路表象に着目することにより街路空間の評価を行う。としての環境も合わせ持つ。また、祭りや伝統文化も受け継がれ、職住文遊の共存するまちであると考えられる。本論文では中京区の堀川通～河原町通・二条通～四条通で囲まれた範囲を研究対象地とする。研究対象地内に多数存在する路地について、街路表象に着目することにより街路空間の評価を行う。

4.路地の分類

対象地内に存在する路地を形状により6タイプに分類した(Fig.3)。本論文においては裏敷地へのアプローチの路地で門・門扉を持たないもの(1タイプ)路地に面したエントランスを持つ住戸が複数あるもの(門を持つものを含む)(2、3、4タイプ)を扱うものとする。対象地内に存在する127ヶ所の路地のうち、1タイプ11ヶ所、2タイプ18ヶ所、3タイプ19ヶ所、4タイプ14ヶ所の計62ヶ所が対象となる。

5.街路表象について

本研究ではストリート・ファニチュア(公共の用に供される屋外施設であり環境を管理し、人々の戸外における行動を支え、コントロールすることを役割とする施設一般)を含む、街路上に点在するもの全てを総称して「街路表象」と定義した。街路表象をその用途により9つに分類する(Tab.1)。管理系は都市生活を成立させるための基礎設備、衛生系は保健・衛生上の関係から人体に直接影響するもの。生活系は本来ならば住宅の中に収められる生活必需品の類とする。

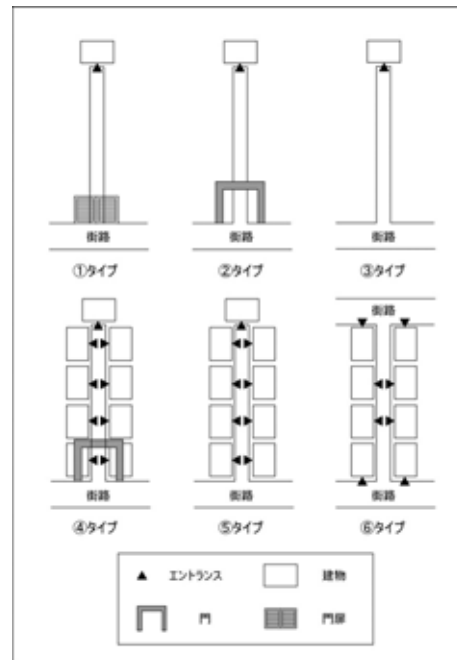


Fig.3 路地の分類

Tab.1 街路表象の分類

管理系	マンホール、バケツ、消火器、室外機、グレーチング、電柱
情報系	掲示板
衛生系	ゴミ箱、井戸、ほうき、ちりとり、アルミ缶、ペットボトル
交通系	ボラード、カラーコーン
修景系	植栽、石、置物
照明系	街灯
生活系	台、物置、洗濯機、道具、洗濯物、台車、かさ、はしご、野菜、冷蔵庫、タイヤ
建具系	すだれ
信仰系	地蔵
乗物系	自転車、原付、車

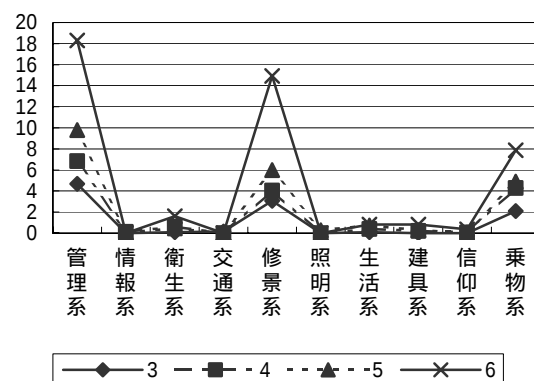


Fig.4 路地のタイプ別街路表象の分布

6.路地における街路表象の分布

路地のタイプ別に街路表象の分布をみると、タイプの路地は4つのタイプのうち最も多くの街路表象があり、タイプの路地で最も少なくなる（Fig.4）。タイプの路地は通り抜けのできる路地で、対象とする4つのタイプの路地の中でもっとも公的な要素を持つ路地であり、

タイプ>タイプ>タイプと順に私的要素が強くなるにつれて街路表象も減少している。管理系、修景系、乗物系はどのタイプの路地においてもほぼ平均的に多数存在するが、タイプが最も多く、タイプ>タイプ>タイプと減少している。

各系統の平均を比較するとタイプとタイプでは同じような分布をしているが、衛生系と生活系の数が逆になっている（Fig.5）。タイプとタイプは路地自体の形状は同じで門の有無に違いがあり、門があることにより私的な路地となり、公的な路地になるほど数を増す傾向にある生活系が減少していると考えられる。

7.路地の分布

路地のタイプ別に分布をみると、タイプの

路地は全てのタイプの中で最も多く存在し、18ヶ所中7ヶ所と二条通付近に多い（Fig.6）。また、タイプの路地は19ヶ所中7ヶ所が四条通付近、タイプの路地は16ヶ所中13ヶ所が堀川通付近に多く分布している。また短冊型で南北に長い街区をしているため、南北方向の街路から横に入る路地が多数を占める。

1 街区に対して複数の路地がある街路は堀川通・烏丸通、御池通・四条通に囲まれた地区にのみ存在し、他の地区では1街区の街路に対して1つの路地のみである。タイプのみ複数の

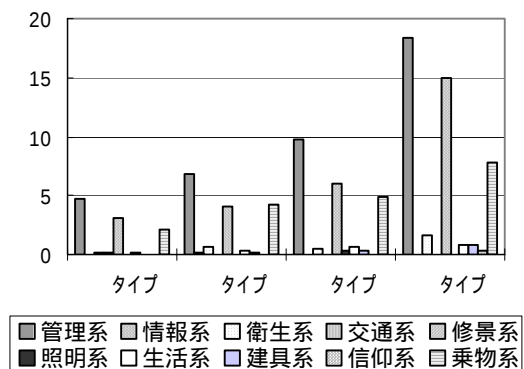


Fig.5 街路表象の系統別分布

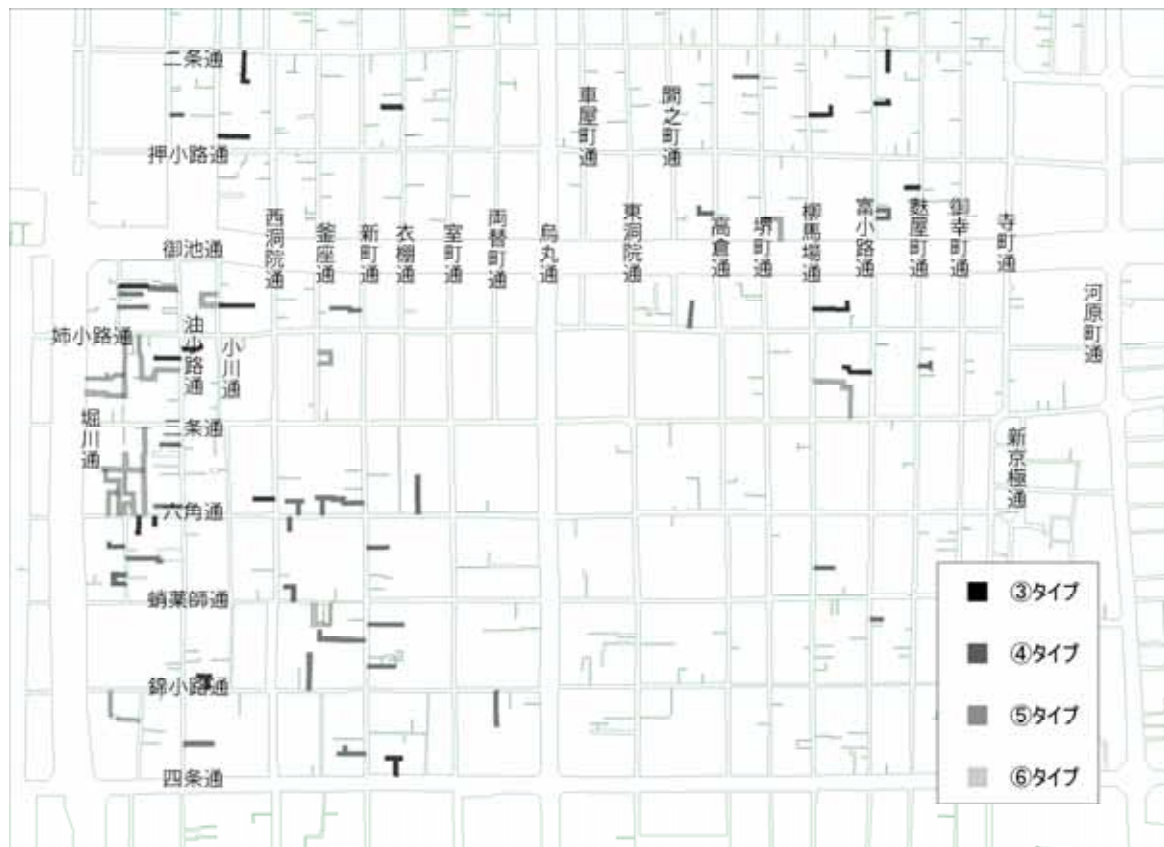


Fig6 路地の分布

街路、タイプとタイプ、タイプとタイプが3ヶ所、タイプのみ複数、タイプとタイプ、タイプとタイプが1ヶ所となっている。また街路表象に着目してみると、複数の路地がある街路の路地に対象領域中で確認できたすべての地蔵が存在している（Fig.7）。京都では各町内会にひとつの地蔵を所有しており、地蔵が地域社会集団のコミュニケーション手段のひとつとなっている。地蔵が確認された路地はその町内の人々のコミュニケーションの場となっていると考えられる。路地が集まっている街区では路地の街路表象。

また、すだれはタイプの路地のある街路に接する路地でしか見られず、住人以外の人を通る機会の多い通り抜けの路地ではすだれを下げるにより、他所者の視線を遮っていると考えられる。

8.まとめと今後の課題

本論文では研究対象内に点在する路地について街路表象に着目することにより、路地空間の現状の把握をおこなった。その結果、路地空間は公的になるほど生活に関係する街路表象が増え、街路表象の数も増加する傾向にあった。公的な路地では街路表象が建物周辺に多数置かれていることにより、家屋敷地と路地との境界があいまいになっている。

今後は既往研究で把握した街路での街路表象の特性と今回得られた路地での知見との比較・検討、犯罪・事故の発生マップと重ねて安全性の点からも街路空間を評価していくことが課題であると考えている。

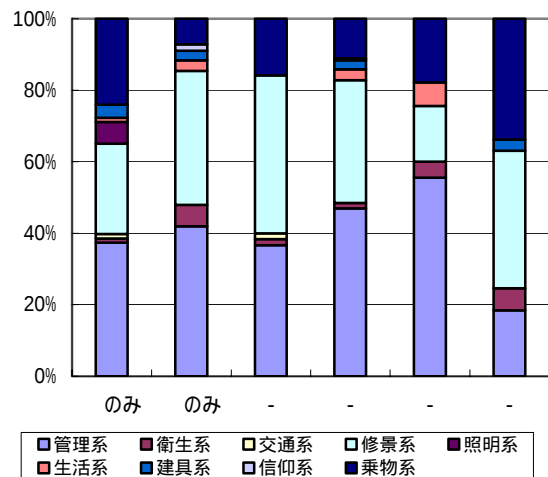


Fig.7 複数の路地がある街路の路地の街路表象

【参考文献】

- 1) 西沢健：ストリート・ファニチュア、鹿島出版会、1983
- 2) 栄久庵祥二：都市の道具、鹿島出版会、1986
- 3) 材野博司：都市の街割、鹿島出版会、1989
- 4) 高橋康夫：京町家・千年のあゆみ - 都にいきづく住まいの原型 - 、学芸出版社、2001
- 5) 山本良介：京都 建築と町並みの「遺伝子」、建築資料研究社、1999
- 6) 辻川ひとみ、北浦かほる、斎木陽子：都市における空間構成要素の位置づけ - ストリート・ファニチュアの定義と分類 - 日本建築学会計画系論文集、520号、pp233～238、1999
- 7) 辻川ひとみ、北浦かほる：商業地における人の動きとストリート・ファニチュア - 戎場足周辺の事例調査にみる - 、日本建築学会計画系論文集、533号、pp119～126、2000
- 8) 京都市中京区役所区民部企画総務課：中京区基本計画、2001